

New Zealand の生活

津 島 克 子

Lisa Oosterdyk は Auckland に住む10才の女の子。父親 Steve はオランダ人の大工さんで母親 Pauline はこの国にしては珍しく専業主婦。Pauline はレバノンからオーストラリアに移民し、New Zealand に住むオランダ人の Steve と結婚した。従って Lisa と弟の Grant はレバノンとオランダの血をひく New Zealander となる。私達日本人にとっては想像もつかない複雑な家系のこの一家も、New Zealand では平凡な中流階級の家族にすぎない。私が彼らと過ごした1年の間に見た New Zealand を彼らの生活を通して、ここに紹介したい。

歴 史

まず Steve の自慢は New Zealand を最初に発見したのはオランダ人の Abel Tasman であり、祖国のゼランダ地域にちなんでこの国をノヴァ・ゼラントと名付けそれが英語読みにされ New Zealand になったいう事だ。

しかし残念ながら探検家 Tasman はこの国に上陸することができなかった。先住民のマオリ族に襲われ、船員が殺されてしまったので上陸を諦めてしまった。その100年後の1768年、キャプテン・クックこと James Cook がマオリ語のできる通訳を伴い上陸し、マオリ族との交渉に成功し英国国旗をたてた。これが New Zealand への白人の第一歩であり、又ここから白人とマオリ族との戦いが始まったのである。その後キリスト教の布教団による植民が始まり、1840年にワイタンギ条約が結ばれイギリスの直轄植民地となった。そして今年1990年建国150年のお祝

いで国中が湧いている。このようにまだ150年と若い国なので、Lisaの家族のように祖父母が移民してきたという人達が大変多い。その中でもやはり一番多いのが英国本土そしてアイルランド、オランダ、ドイツなどのヨーロッパ諸国だが、もちろん太平洋の島々フィジーやタヒチなどからもかなりいる。彼ら Islander は、New Zealand にあまり良い影響を与えないとして歓迎されていない。確かに彼らの目的は、政府から与えられる dole (失業手当) のようだ。この dole の額はわからないが、とにかく安いアパートが借りられ、毎日1本のビールを飲んで、週末には映画を見に行くことができる程だそう。何しろ大きな会社がどんどん人員カットをし、Islander に限らず失業者が町にあふれている。頭のよい人や、やる気のある人はアメリカやイギリスに行ってしまうそう。これが現在の New Zealand の大きな問題にもなっている。

さて Oosterdyk 家の一日は朝7時に始まる。まず Steve が起き最初にするのは、なんと妻の Pauline にお目ざめのミルクティーを入れベッドに持って行くのだ。そして "Honey, tea is ready." などと言っている。愛妻がミルクティーをベッドで飲んでる間に自分でコーンフレックスやトーストなどを食べて仕事に行く。ミルクティーで目のさめた Pauline は子供達を起こし、朝食を食べさせランチを作る。朝食はコーンフレックスにトースト、それに卵。冬は Porridge になる。これはオートミールを牛乳や水でどろどろに煮こみそれに砂糖やバターミルクをかけて食べるのだが、どうも糊を食べているようで私は好きではなかった。ランチはサンドイッチ。それもピーナツバターやジャム、そして Vegemite という野菜のエキスから作った黒く発酵臭のするものをぬる。よく飽きないと思う程これのくり返しだ。よくてハムのサンドイッチというところだろうか。大人もほぼ同じようだ。子供はこれに飲み物を持っていく。それがミルクかジュースなのだが、そのジュースも日本ではも

う見られなくなったと思う粉ジュースだったのには驚いた。

朝食がすむと歩いて5～6分の学校へ車で送って行く。朝と帰りの時間になると学校の前に車の行列ができる。(こちらの人は朝晩わざわざジョギングする人達も、50m先のお店にまで車で行くのには理解できない。) Pauline は子供達に学校まで歩かせたいが、やはり危険だからと言っていた。住宅街で日中家にいる人は少なく、まして道を歩いている人などほとんどいない。一步後ろは森や海、連れて行かれてもわからないだろう。学校でもその点をずいぶん注意している。必らず集団で歩くようにと言っているがかなり広範囲から来ているし、その割には子供の数が少ないのでやはり親が守らなくてはならなくなる。

教 育

リサ達が学校に着くのは9時少し前。9時のベルが鳴るまで多少の雨が降っていようが教室の中に入ることはできない。学校制度は簡単なようで複雑だ。基本は6才から15才が義務教育なのだが、その間の呼び方が学校によって違う。

5(才)	} Junior		だいたい左の様になっている。5才～11才までを Primary School。11才～13才までを Intermediate その上を College 又は High School というが College の方が多いようだ。又5才～13才までを Primary に入れている所もあれば、12才を Form 1 にしているところもある。Form は7までありその後が大学又は専門学校になる。
6			
7		1	
8	} Stand	2	
9		3	
10		4	
11	} Form	1	
12		2	
13		3	
14		4	
15		5	

これでいくと、Lisa は Std. 4 で Grant は Std. 2 になるはずだが彼らは自分の Std. を知らなかった。Lisa のクラスには9才から11才の子がいるというし、Grant のクラスには7才から9才の子がいるという。そして彼らは Room No. で言いあっていた。これは他の学校でも聞いたこと

があるが年の違う子を入れて、上の子が下の子の面倒をみたり、時には勉強を教えたりもし、お互いに助け合うのでとても効果があるという。子供の数が少ないのでできることだろうが、日本ではとても考えられないことだ。

又、ほとんどの Primary が5才児から受け入れており、それは Kinder Garden とか Junior と呼ばれ義務教育ではないが、Primary School の一環として組まれている。5才の誕生日を迎えた子は、いつでも入学が許される。日本のように、4月にそろって入学式などというものはない。クラスによっては毎日新入生がいたりする。先生にとってやりにくいのではないかと思うが、特に気にかけている様子もなく、子供も自然とクラスにとけ込んでいくようである。

又よく理解できないのが時間割だ。算数と国語は毎日あるが、その日にやる事は毎朝黒板に書かれる。時間もその日によって違うのである。毎日決まっている時間は、次の通り。

9 : 00	その間の時間の配分は担任に任されている。算数
}	
10 : 40	以外に教科書はない。いつから教科書がなくなった
} Morning tea	のか誰もはっきりしなかったが10年以上前のよう
11 : 00	だ。理由の一つに、政府の費用節減で教科書まで作
}	
12 : 00	るのをやめてしまったとは驚くことだ。その為先生
} Lunch	
1 : 00	は自分で教材を作らなくてはならないので大変だそ
}	
3 : 00	うだ。

授業の進め方は、Project と言っていたが、例えば今月の Project は “Olympic”，今月は “News” 又は “Animal” などとても漠然としている。一つ Project が決まると一、二ヶ月はそれだけをいろいろな角度、方面から勉強し、最後に自分なりの Report を作って終わりになる。Lisa のクラスで “World” の Project の時、毎日国籍の違う父母が教室に行き、スライドを見せたり話しをしたりした。私も一日参加し、日本の昔話し

をし、おり紙を教え、楽しい一日を過した。翌日は Pauline がレバノンのお菓子を作り Lisa に持たせた。その Project の最後の日に又クラスに呼ばれ行ってみると、教室中に世界各国の品物（人形、お金、民族衣装など）が並び、子供達のお国自慢が始まった。自分の親の国を理解するよい機会になるし、父母も協力できる自由が羨ましいと思った。

授業の進度はかなり遅いように感じた。各自のスピードに合わせた教え方で、新しい事も、先生が黒板に向かい全員に一度に教えるという事は少ない。5～6人が一グループになっているので各グループで教えてり、前の事が終わった生徒から次へ進むというようだ。

New Zealand の先生はよく生徒に本を読んであげる。College でも例外ではない。Primary では朝始まった時や Lunch の後などの、まだ子供達が落ちつかない時がよいそうだ。20分程読んでいると皆落ちてきて勉強に入りやすいという。College では聞いて理解する訓練になるし、何しろ生徒が好きだからと言っていた。

Tea Time

学校に限らず銀行や会社、いやこの国にとって朝11時前後にとる Morning Tea はことのほか重要な様だ。この国は何をするにも紅茶で始まり紅茶で終わる。Pauline のようにご主人に紅茶を入れてもらい、女王様のようにベッドでまず一杯目の紅茶を啜る女性が少なくない。

家庭ではともかくとして、学校や職場で出される紅茶は決して上等のものでもなく、カップもガラスの安ものを使っている。何をそんなに目の色変えて騒ぐのだらうか。最近コーヒーを飲む人も多くなってきているが、やはり紅茶に敵わない。ただ注ぎ方に品がない、と私は思う。日本のようにカップ八分目、良いお茶程少なめにが適用しない。カップ八分目まで紅茶を入れ、たっぷりミルクを注ぐ。やはりミルクを先に入れる人の方が多いが、とにかく溢れんばかりに注ぐ。そして必ずケーキや

ビスケットがついている。彼らの昼食が軽いサンドイッチだけですものも、この Morning Tea があるからだと思う。この Morning Tea の時間を、会社で特に男性は Smoke-oh とも言う。これは昔、仕事の合間にたばこを一服すって一休みしたことに始まる。

子供達もこの Morning Tea の為、昼食のサンドイッチの他にくだものやビスケット、又はポテトチップスなどを持って行く。日曜日に一週間分のビスケットを焼いておく母親もいる。又子供にも大人にも人気のあるのが、Muesle Bar や Granola Bar という、オーツや玄米などにチョコレートやフルーツの味をつけた栄養バランスを考えたお菓子がある。中には人参やセロリをかじっている子もいて、見ている方も楽しくなる。

宿題もない子供達は家で勉強している姿をほとんど見たことがない。何しろ Grant 位の年では筆箱を持っている子も少ないようだ。筆記用具、はさみ、のりなど全て学校で支給されている。Lisa の年になると学校のもは使わず自分のを持って行きたがる。ほとんどの子が大きな Day bag をしょっているが中味は、Lunch box と 2, 3 冊のノートだけだ。

塾などないが稽古事に行く子も少ない。女の子はピアノかバレエ、男の子はラグビー又はサッカーに人気があり、空手も増えてきている。大人になって成りたいものは、女の子は先生、男の子は All Blacks のメンバーが一番人気だった。

Lisa は週に一度 Brownie (ガールスカウト) に参加し、Grant は Cub (ボーイスカウト) に行っていた。その他は二人で TV を見たり、Pauline の運転で近くの友達の家に行き遊ぶ。TV と言っても 2 チャンネルしかなく、子供向けのプログラムもほとんどない。New Zealand で制作されたものも少なく、オーストラリアやイギリス、アメリカの番組を見ることになる。昨年暮れにやっと 3 チャンネルができたというこ

とだ。

New Zealand の男性は、仕事の帰りにパブにちょっと、ということがあるのだろうか。私の知る限りほとんどのご主人は定刻に家に直行する。時計のようだ。パブに行くこともないが、残業もない。夏の明るいうちに帰宅すると、子供達と遊び、庭の手入れをする。バーベキューをするのもご主人の仕事。そして食事の後かたづけも手伝う。ほとんどの家に食器洗い機があるが、何か女性に甘い気がする。おまけに食後のお茶まで入れてくれる。私は Steve が食器をかたづけ、お茶を入れてくれるまで、なんとも居心地が悪く落ち着かないが、Pauline はデンとイスに座り、うつらうつらしながら TV を見ている。

この様に男性が家事を手伝うようになったのも最近のことで、Steve 達の両親の年代ではやはり考えられない事だったそうだ。しかし何故かそれを彼らは話したがらないという。現在の親の姿を見ている次の世代は、どのように変わるのだろうか。

Lisa と Grant は 9 時にベッドに行く。二人の入浴は週に 3 回。多い方だ。それも 2, 3 分程のシャワーか、水のようなお風呂にさっとつかるだけ。

現在でも小学校では年 2 回ノミとシラミの検査が行なわれる。家も外も同じ靴で歩き、ペットがベッドの上を走り回わり、芝生の上を駆け回る。そして入浴もしないでは、ノミもシラミもわくはずであろう。

動物につくノミは人間には刺さないと聞いたが、刺すようだ。それも新しい血の匂いがわかるのか、新入者が攻撃される。ノミより恐いのが Sand fly というハエ科の昆虫。ハエというより少し大きめの蚊のようなもので、これに刺されるといつまでも赤く腫れ上がり、とにかく痒い。

子供が寝静まると、親もその日の最後の紅茶をゆっくり楽しみ一日が

終わる。

彼らは比較的早寝早起きで、学校や会社のミーティングも早朝に行なわれることがよくある。朝9時というのは、彼らにとって一働き終わった時間。勤務時間が8時30分から4時30分までという会社も多い。帰社時間になると、ピタッと仕事は終わり家路に急ぐ。遅くとも5時30分には家に着く。それから着がえて遊びに行くなり、散歩をしたり充分楽しむことができるという恵まれた環境にいる。

Party

5時に会社が終わると、デパートやお店も全部閉まってしまう。会社の帰りに買物をというわけにもいかない。又東京のように、どこに行ってもお店があるというわけでもなく、Aucklandでも大きなお店があり楽しめる所は数ヶ所に限られている。そこで各商店街ごとに週に一度Late Night Shopping Day といって夜8時か9時頃まで営業している日がある。もちろん土曜、日曜も営業しないので、このLate Night Shopping Day はとても重要かつ楽しめる一夜である。

平日は買物もできず、質素な彼らは外食などもしない。娯楽といえば映画ぐらいだろうか。学校が休みになると映画館はどこも込み合い、数少ないマクドナルドは子供達で溢れている。しかし自然に恵まれているので日本では考えられないような事を簡単に楽しめる。例えば、海や山。都会のAucklandでも、10分もあればきれいなビーチに着く。ハイキングコースや広い公園もいたる所にある。

Lisa と Grant も休みになると、Steve 手作りのカヌーを持って近くの海に行き一日中遊んでいる。それにも飽きると牧場に行き、馬や羊と遊ぶ。遠くから見るときれいに見える牧草地も近くに行くと糞だらけ。私は始めよけながら歩こうとしたが、とても間にあわない。あれだけの数の羊がいれば、それだけの落としものがあるのだ。その牧場でランチに

呼ばれた。メニューはラム肉のバーベキュー。今そこにいた羊かと思うと、とても食べられないがあちらの人は意にも介さない。

大人の楽しみは、友達を家に呼んでのパーティー。全て西洋化されてきた日本も、このパーティー方式だけは取り入れにくいだろう。いろいろなパーティーがあるが、まず大人と子供を完全に分けることだ。

Pauline も Lunch だ Dinner だといって月に 2, 3 回友人を招待する。彼らは必ず夫婦で招き招かれる。(昨日仲良くきていた夫婦が次の日別居したなどという事も本当にあったが…)そして始まるのは、夜 7 時から 8 時。という事はもう子供は招待されていないことになる。年寄りとの同居がないこの国だからこそ、こういう時に Baby-Sitter が必要となる。子供同志が同世代の場合は連れて来る時もあるが、その時は挨拶だけすると子供は子供部屋に消えていく。ジュースひとつあげるわけでもない。招かれた方も心得ていて、子供にだけ家で食事を与えてくる。余程の幼児でなければ、大人のじゃまをする子はいない。しかしデザートの頃になると、一人現われ二人現われ横目でデザートを見て行ったりもする。それでもいっしょのテーブルに付かせる事はない。

ある Lunch のパーティーの時も子供達には先に簡単な Fish and Chips を食べさせ、大人はおしゃべりを楽しみながら、ゆっくりとご馳走を食べたという事もある。ここまで日本人が割りきれぬだろうか。

もう一つのパーティーは Progressive Dinner と言って、一回の Dinner を何軒もの家を回っていくものがある。例えば、まず 6 時に最初の家。そこでは前菜と飲み物が用意されている。そしてそれが終わると全員で次の家に行く。そこではメイン料理があり、又次の家ではデザートを頂き、最後の家のお茶で終わる。というとてもユニークなものだ。よく会社仲間で行なわれているが、これも交通手段が車という環境、そして小さな町だからこそできるものだろう。

どこの国も外から見ると、その社会で生活してみるとでは大きな違いがあろう。New Zealand も「南十字星と羊の国」というとてもきれいな国ではある。しかし現実の社会は、少し活気が足りない。気の毒なことに、どこの国からも遠すぎるのだ。あまりに世界の動きを知らないし、知ろうともしない。そして全ての事に欲がない。欲がないという事は向上心もない。現在の自分の生活さえ保たればそれで満足だという。何か計画してもとにかく人口が少なすぎるし、秀れた人材は海外へ流出してしまっている事に全ての原因があるように思う。ただ、何もする気を起こさせない程のゆっくりとした生活と、大きなすばらしい自然があることだけは確かだ。